

フィリピン派遣に向けて



手術センター看護師
梅野 幸恵

プライマリーヘルスケアという言葉をご存知ですか？
全ての人々のもつ心身ともに健康である権利を保障する活動です。プライマリーヘルスケアは、私が今回赴くフィリピンでの活動の目的です。

活動場所はキノ州ナグティプナン郡というところ。この場所は首都マニラから北375Km、車で8～9時間、人口23,692人、キリスト教徒が多く、言語は主にイロカノ語、英語、90%以上が農家です。さてこのプライマリーヘルスケア、日本では元佐久総合病院長の故若月俊一医師が、戦後、農村で予防医学や巡回診療を行った事で有名です。

私が1月から6ヶ月間赴任する場所は農村でも特に山岳地域の僻地で、川を船でさかのぼり、何時間もかけ山道を歩き村を巡回します。医者もいない、衛生状態の良くない村々です。住民の方々が、衛生状態を向上する意識をもち、安全な飲み水の確保が出来、色々な感染症の予防が出来るよう、相手の立場に立って一緒に考え、活動していくのが役目です。

それまでの習慣や、環境的な問題で、すぐに何かが変わるわけではありません。2人3脚で息の長い活動が必要です。現在、フィリピンの他にアフリカなどでも日本赤十字社はこのような事業を展開しています。

日本赤十字社は、緊急救援だけでなく、地道ではありますが先を見据えた息の長い支援にも力を入れてきています。

長年の夢が叶い、このような機会を得る事が出来ましたことを感謝するとともに、この派遣で得られる経験を日本の地域での看護に生かしていきたいと考えています。



新型インフルエンザ対応 実動訓練

2007年11月22日(木)午後1時～4時まで新型のインフルエンザが海外で発生したと想定し、海外から帰国した男性が不調を訴えて直接当院に受診する場合と、保健所より紹介され救急車にて来院する場合の対応訓練を実施しました。



総合診療科で受付後、マスクを着用する模擬患者



医師・看護師はPPE(個人防護具)を着用して診察



救急車で直接、感染症診療室に搬送



診察・検査終了後、病室へ移動

がん体験者による 「ピアカウンセリングセンター」



がん体験者による
「ピアカウンセリングセンター」の設置

東京都は、がん体験者ががん患者さん・ご家族のお話を伺う「西部ピアカウンセリングセンター」を当院に設置しています。

「がんになった不安な気持ちを体験者に聞いて欲しい」とお思いの方は、お気軽にご利用ください。なお、病気に関するご相談は、5番館1階「がん相談支援センター」で専門の医療スタッフが伺っています。

場所：武蔵野赤十字病院 1番館1階
相談日：月・水曜 10時～15時(2008年3月末迄の予定)
電話：0422-32-3282(直通)

2008年 冬
季刊 情報誌



No.15

武蔵野赤十字病院

〒180-8610
東京都武蔵野市境南町1-26-1
TEL 0422-32-3111
http://www.musashino.jrc.or.jp
発行 総務課 広報係

アイ
Eyeむさしのは患者さん向けの情報誌です
ご自由にお持ちください



お母様よりお言葉を頂きました。

先生、看護師さんをはじめスタッフの皆さんに優しくしていただき病状も徐々に良くなってきました。安心して治療に来れる病院です。感謝しております。本当にいつもありがとうございます。

2008年1月21日 眼科受診時にて
担当：池田哲也眼科医師

基本理念

愛の心を高める

基本方針

病院職員は、愛の心を高め
「愛の病院」を実践します

4つの愛

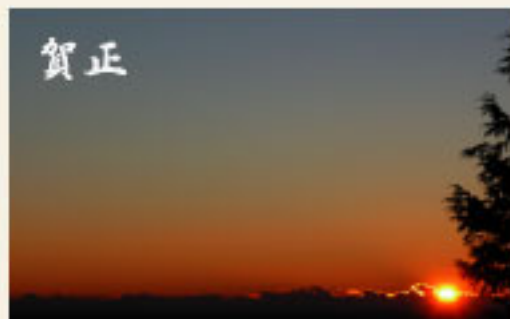
病む人への愛
同僚と職場への愛
地域住民と地域への愛
地球、自然、命への愛

院長に就任して



武蔵野赤十字病院 院長
富田 博樹

本年1月に三宅院長の後任として院長に就任いたしました。私は、1973年に大学を卒業し、脳神経外科医として米国を含め、いくつかの病院で研修をした後、1984年から当院脳神経外科に勤務いたしております。この二十余年の間に、各科に優秀な指導医が部長として就任し、最新の医療を行える病院になりました。私は脳神経外科部長として診療に携わるほかに、現救命救急科のスタッフ着任まで、救急部の部長を兼任し、救命救急センターの運営にも携わりました。また、市民のみなさまが病に倒れた時に、急性期から慢性期、在宅療養まで安心して暮らせる地域をつくりあげるため、武蔵野市・三鷹市の医師会、各病院、市当局と共同で連携体制の構築を進めてまいりました。設備の面でも、この間に大きな建築が4回にわたり行われ、特に、三宅前院長が救命救急センター・外来棟・脳卒中センター・血管造影室・化学療法室を建築・整備し、21世紀における最新の医療を行うために必要な体制づくりが整ってまいりました。また、当院は安全で安心な医療についてわが国のさまざまな先駆的な取り組みを実践してまいりました。これからも、三宅前院長がつくりあげた体制と基本理念を継承し、赤十字精神『人道・博愛』に基づいて、地域のみなさまに信頼される中核病院として、救急医療、がん治療、急性期医療の充実而努力して参ります。今後とも当院を受診されるみなさまや医師会の先生方、行政の方々のご協力とご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。



高尾山山頂付近

『外来化学療法室』 が統合新設されました



血液腫瘍内科 副部長
中根 実

がん診療連携拠点病院である当院におきましては、よりよいがん診療を実現するために、1番館2階に「外来化学療法室」を新設いたしました。主に抗がん剤の点滴治療を通院で行う治療室です。これまで内科と外科に分散していた外来化学療法は当室に統合され、一部は内科の点滴治療室として引き続き使用いたします。新設「外来化学療法室」は、治療上の安全と効率をさらに高め、快適な治療環境の提供をめざして、診察室、処置室、面談室を備え、リラックスしていただけるような内装としました。スタッフは従来と同様にがん薬物療法専門医をはじめとする腫瘍内科医と各科医師・専任看護師らが診療にあたります。

こんにちは！



乳がん看護
認定看護師です

西巻 佳子

外科外来を中心に活動しています。私の主な役割は、患者さまとご家族への治療にともなう身体的・心理的・社会的サポートはもちろん、治療選択のサポート、ボディイメージの変容に関わるケア、術後のリンパ浮腫予防のためのアドバイスを行うことです。乳がんは年々増加し、女性の臓器別がん罹患率では胃がんを抜いて第1位となっています。乳がんの早期発見には、自己検診が大切です。閉経前の方は生理後から1週間の乳房が柔らかい時に、閉経後の方は検診日を決めて、月に1回自己検診を実施しましょう！気になることがありましたら、専門の医療機関への受診をお勧めします。尚、当院の外来棟3階にある情報ラウンジ内(眼科外来の横)に資料をご用意いたしております。

インフルエンザ



感染防止対策委員会
呼吸器科 部長
吉澤 正文

インフルエンザウイルス感染による全身疾患がインフルエンザです。昔から大流行を繰り返し、スペイン風邪、香港風邪、ソ連風邪などと呼ばれました。「新型インフルエンザ」としてまた大流行を起こすのではないかと考えられています。インフルエンザは普通の風邪ではなく、強い全身症状を伴います。高齢者や小児などでは致命的となることがあります。インフルエンザの流行は日本では一般に冬の出来事と受け止められていますが、「新型インフルエンザ」を含めて、それ以外の季節にも起こる可能性があります。

どのようにうつるの？

空気中のインフルエンザウイルスを吸い込み、のどの粘膜などからウイルスが入り込みます。また、手についたウイルスが、目や鼻の粘膜から侵入することもあります。感染から発病までの潜伏期は1-2日、患者からウイルスが排出されるのは症状が出る前日から解熱後3-5日目くらいまでと考えられています。インフルエンザに限らず、せきが出る人はマスクをするのがエチケットです。(マスクがない場合、せきが出るときには人のいない方を向き、手やティッシュペーパー等で口元を覆うようにし、そのあとで手を良く洗うようにしましょう)



感染や重症化の予防には

人ごみを避けること、マスクをすること、手洗い、うがいを励行することとならんで、感染予防として最も有効なものはワクチンの予防接種です。毎シーズン、流行が予想されるウイルス株に対応してつくられています。インフルエンザに感染し重症合併症を起こすと致命的となる危険性の高い人には、ワクチンの予防接種が勧められます。たとえば、高齢者、呼吸器の病気や心臓の病気を持つ成人小児、糖尿病、腎障害や免疫不全状態の成人小児にはワクチンの接種が特に勧められます。卵アレルギーのつよい人には接種してはいけないことなどの限界がありますが、ワクチンの予防接種が感染や重症化予防に最も有効なことに変わりはありません。

症状としては

高熱、頭痛、全身の筋肉痛・関節痛、倦怠感、食欲不振などです。のどの痛み、鼻症状、せきなどもみられます。高齢者では肺炎を合併することがあります。小児では、中耳炎、結膜炎、胃腸炎、痙攣もみられます。また、小児では健康成人と比べ、脳炎・脳症という重症合併症を伴いやすいのが特徴です。インフルエンザの小児に中枢神経障害と肝臓などの脂肪変性を合併することがあり、Reye症候群と呼ばれています。インフルエンザにかかっているときにアスピリンを使うとこの状態が起こるとされていますので、インフルエンザの小児にアスピリンを使用してはいけません。

治療については

安静、休養が必要なのは言うまでもありません。現在、抗インフルエンザウイルス薬として数種類有ります。いずれもインフルエンザによる症状を軽くしたり、1-2日程度短縮するのですが、症状が出てから48時間以内に使い始めないと効果が期待できません。また、妊娠中(その可能性も含む)や授乳中の使用や小児に対する使用には制限があります。治療薬との因果関係については不明ですが、インフルエンザの経過中に意識障害、異常行動などが起こることが知られていますので、病状には注意が必要です。いたずらに恐れることはありませんが、そのためには日頃からインフルエンザ予防をしっかりとっておくことが大事です。

